

□ ピアノ

真 嶋 雄 大

2020年は音楽業界のみならず、世界は未曾有のコロナ禍に見舞われた。コンサートをはじめとして、PMF2020やびわ湖クラシック音楽祭、アルゲリッチ音楽祭など音楽祭やイベント類の大半は中止、延期の憂き目に遭い、ショパン国際コンクール、エリーザベト王妃国際コンクール、浜松国際コンクールなどコンクールもみな2021年に延期となった。ゆえに演奏機会を失い、経済的にも逼迫した状況に追い込まれた演奏家や音楽関係者も少なくはない。たとえコンサートが成立しても、ソーシャル・ディスタンスを取るため入場者が制限され、それも収入を圧迫する要因となった。誰もが暗中模索をする中、無観客でのコンサートや有料無料のオンラインでの音楽配信など日々可能性を追求し、多岐に亘る手法が試みられているが、やはり演奏は生もの、顕著な効果を得られるケースは少ないように思う。

就中、もっとも被害を受けたのは、2020年が生誕250年にあたるベートーヴェンではなかったか。本来であれば聖聖のメモリアルイヤーが大きく採り上げられ、多彩で濃密なコンサートやイベントが世界中で華麗に繰り広げられるはずであったが、現実には真逆な惨憺たる状況となってしまった。それでも音楽家たちは、音楽の力を信じ、ベートーヴェンと対峙した。

ダニエル・パレンボイム、イリーナ・メジュエワ、コンスタンチン・リフシツ、イゴール・レヴィットらはベートーヴェン「ピアノ・ソナタ全集録音」をリリースし、メジュエワは東京文化、宗次ホールなどで全曲演奏も完結させた。野平一郎は「ベートーヴェンのピアノ・ソナタの名演奏をCDで振り返る」というレクチャー・CDコンサートを開催、1月、ジャンルカ・カシオーリは本名徹次指揮新日本フィルとピアノ協奏曲第2番を情感たっぷりに演奏して喝采を浴びた。2月にはイーヴォ・ポゴレリチがソナタ第11番などを、3月にはアンドラーシュ・シフがソナタ「告別」などを演奏、それぞれの解釈で聴衆を楽しませた。また「ベートーヴェン、そして…」というシリーズを敢行中の小山実稚恵は、10月にソナタ第30番とJ.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」を組み合わせて変奏形式を対比させ、11月には山田和樹指揮横浜シンフォニエッタと、ピアノ協奏曲第0番と同第5番「皇帝」を弾き比べるという興味深い取り組みを行っている。

10月にはベテラン深沢亮子がチェロの安田謙一郎とのデュオで、ベートーヴェンの変奏曲やシューマンなどを演奏して健在ぶりを示し、11月には小倉貴久子がフォルテピアノを3台並べ、ベートーヴェンのソナタ第1番、第23番「熱情」、第29番「ハンマクラヴィア」を弾き別けるというプロジェクトで聴衆にアピールした。

また同様にベートーヴェンのソナタ全曲演奏と全曲録音を実践した河村尚子であるが、そのピアノ・ソナタ全曲録音に対し、第12回CDショップ大賞2020・クラシック賞が贈られ、さらにその顕著なる演奏活動に対し、第51回サントリー音楽賞も授与されている。加えてスウェーデン在住のピアニスト和田記代は、スウェーデンの作曲家であるステーンハンマル友の会を主宰し、「府中の夏 北欧の風音楽会2020」を開催、ベートーヴェンとステーンハンマルは、生没年がちょうど1世紀異なるということで、両者のピアノ・ソナタを比較演奏して聴衆から高い支

持を得た。

ベートーヴェン以外にも、3月になるとほとんどのコンサートが延期、中止になったが、1月にチャイコフスキーやプロコフィエフを弾いたエリソ・ヴィルサラーゼ、演奏生活40周年を記念したりサイトを開いた青柳いづみこ、2月にショパンのソナタ第3番などを演奏した萩原麻未、3月にはかなり規模が縮小した「東京・春・音楽祭」で、「ピアノの時間」という小品を集めたリサイトを開いた三浦友理枝、デビュー20周年を迎え、モーツァルトとチャイコフスキーに特化した演奏を繰り上げた上原彩子、7月にはプロコフィエフなどを取り上げた土屋美寧子、ドヴォルザーク「新世界より」などを2台ピアノで表現したピアノデュオ・ドゥオール、9月には東京オペラシティの「B→C」シリーズに登場、ピアノ、チェンバロ、トイピアノ、プリペアド・ピアノを駆使し、J.S.バッハやケージ、武満徹、藤倉大の作品を演奏した北村朋幹、10月にはショパンのピアノ独奏曲全166曲を2日間で全曲演奏する超人的なコンサートを10年も続けている横山幸雄のリサイト「入魂のショパンVol.11」、11月にはシューマンのスペシャリスト、小林五月による「シューマン・ツィクルスVol.11」、特別演奏会として、菊地裕介、広瀬悦子、島田彩乃、吉田友昭が登場した横浜招待ピアノ、そして11月10日の恒例バスディ・コンサートに登場、同時に演奏生活60周年のメモリアルとして元気な姿を見せた84歳になる館野泉などが目を引いた。

また日本の若手ピアニストも各々自らのスタンスを確立しつつある。2019年秋のロン＝ティボーの覇者三浦謙司、第2位務川慧悟、チャイコフスキーコンクール第2位でクララ・ハスキルコンクールを制するとともに出光音楽賞を受賞した藤田真央、ベートーヴェン・コンクール第2位の竹澤勇人、グリーグ国際ピアノコンクールの覇者高木竜馬、東京音楽コンクール第2位の谷昂登など気鋭の新人も台頭してきている。また若手の代表格反田恭平は、自らのレーベル「NOVA Record」を設立、8月にはソロアルバム「メンデルスゾーン 無言歌集Vol.1&厳格な変奏曲」をリリース、無言歌集は3年かけて全作品を録音するという。また第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールで第2位に入賞した川口成彦には日本ショパン協会賞が贈られ、その日本ショパン協会は、これまで長く会長を務めていた小林仁が退任、新しく海老彰子が会長に就任した。その他、阪田知樹、小林愛実、松田華音、尾崎未空など、これから飛翔するピアニストたちへ期待する声は大きい。

一方で1月、20世紀を代表する大ピアニスト、ウラジーミル・アシュケナージが演奏活動からの引退を表明、まさに隔世の感があった。

また2020年は訃報にも多く接した。2月1日には、武満徹とも親交が深く、ミントーンなどを駆使するピーター・ゼルキンが72歳で他界した。2月26日には幾多の名ピアニストを育てたセルゲイ・ドレンスキーが89歳で、5月24日にはやはり名教師である有賀和子が92歳でこの世を去った。また日本人で初めてDGと契約した荒憲一が6月6日に81歳で、7月2日には作曲家でもあるニコライ・カプースチンが82歳で、8月2日には類稀な演奏と指の故障に直面したレオン・フライシャーが92歳で、また東京藝大で教鞭も執ったクラウス・シルデが12月11日に94歳で、12月20日にはリーズ国際ピアノコンクールの創設者フアン・ウォーターマンが100歳で、そして12月28日にはショパンコンクール入賞者でもあるフー・ツォンが86歳で鬼籍に入った。

普通という感覚がいかに大切か、誰しもが実感した年であったが、2021年ではできる限り早くコロナ禍が終息することを祈る。明けぬ夜はない。